

オイコノミア

松島和志

ママが食事作らなくなる

僕はひとりで食事を楽しむ

そのときはじめて、ママと言える モモとかナナとか女の名前として

ママが歯磨かなくなったら僕はブラシ口に突っ込む

そのとき、僕は初めて子供を育てる

ママそのとき涙が出る

あつい涙が流れていく

ママ、飴舐めなよ

歯磨いたばっかりだけど

ママはきつと名前知らない

ママという名前しか知らない。

だから

偽物のアーチをくぐってはいけない

砲台が鳴く

しあさつての方向に

ライオンが鳴く

しばらくして鳥も鳴く

美しからざるものたちは町を追われて歩き出す

まるで死に場所探しのよう。

僕はママではない女に花を買う

そのときはじめて、ママと言える メメとかネネとか女の名前として

僕はいま切実な花を小脇にかかえ明け方の砂漠を歩く

這う虫のように

吸う息を数える。

僕は泣いていた ああ、オイコノミア！

僕は彼方に駆け回り、ほとぼしる唾液は砂に沈み込んで染みになった
倒れ込んでいた

僕はむくりと立ちあがり、肩を空に見せつけた

僕は室に根を張り正確にママをみごもる

そして蛹のようにただただ時間を待っている

遠くへ 規則正しく

暖かな木琴の音になる

交差する脚の間に石が地表には輝いている。